

カウンセリング過程とその評価に関する研究（Ⅲ）

—— 情報理論による分析検討への試み ——

目 次

はじめに	1
I 目 的	1
II 方 法	1
1 仮説	1
1) 仮説1	1
2) 仮説2	2
2 対象	2
3 測定	2
1) カウンセラーの発言分析標識と評定法	2
2) クライエントの発言分析標識と評定法	2
4 手続	3
1) 評定	3
2) 分析検討	3
3) その他	
III 結 果	4
1 発言評定の度数分布	4
2 クライエント発言の内的情報	4
3 治療的關係における情報伝達反応	6
4 受容的カウンセラー発言とクライエント発言間の情報伝達反応	7
5 クライエント発言転移とクライエントの沈黙	9
要 約	10
参考文献	10

教育相談活動とその研究・研修に資するために、これまでカウンセリング過程とその評価に関する継続研究を共同研究的に実施してきた。これらの研究内容は、カウンセラーの治療的条件の吟味検討をもかねたクライアントの発言分析、治療過程、治療の体験などに関するものであった。^{1) 2) 3) 4) 5)}

一方、カウンセリング過程とその評価に関する総合的研究をめざし、その研究方法上の問題を絶えず吟味検討を重ねてきた。

この研究内容は、カウンセリングの治療的過程、カウンセラーとクライアントとの言語的關係状況を情報理論⁶⁾によって事例的に分析検討したものである。この研究成果はカウンセリングの治療過程の究明に、新しい研究方法上の一視点を与えるものであろう。

カウンセリングの実践には、携わるものが自己の最善をつくす専心従事、それに基づく研究的試行とが絶えず並行してなされることが望まれよう。このような意味において、あえて表題に示す研究を試みたので、その結果の一端を予報としてまとめ記述する。

I 目 的

カウンセリング過程とその評価に関する総合的研究に資するために、カウンセラーとクライアントとの言語的な治療的關係状況を、情報理論による事例的な分析検討を試み治療の効果を究明したい。

II 方 法

1 仮 説

次の仮説1、仮説2は治療的過程が固定から流動への連続線にそって移っていくということを前提条件として設定してある。⁷⁾

1) 仮説1

クライアントの治療的体験の過程が発言（陳述）の経過と関連があり、しかも、その発言の経過がマルコフ的過程^{*}をなすものとすれば、発言に類型的な冗長性あるいは系列的依存性^{*}があって、その変化が治療的效果を示す一指標となろう。

2) 仮説2

治療の場面でのカウンセラーとクライアントとの言語的關係状況が相互作用的であり、しかも、その關係状況が相互に刺激—反応的關係状況に置換できるとすれば、これらの情報量間の関連の変化が治療的效果を示す一指標となろう。

注*) マルコフ過程 (Markov process) というのは、二者択一的事象が、先行する事象に関連して連続的に生起する過程的反應をいう。マルコフ過程のある連において類型的反應が生起する確率を冗長度といい、ある連をなす性質そのものを系列的依存性と考える。

2 対 象

登校をいやがる小学校1年生女子の母親とのカウンセリングの面接逐語記録であり、その初期の第1回目、第3回目(第1回目から15日後)とを用いる。それぞれの面接逐語記録は、30秒以下のクライアントの沈黙、カウンセリング前後の連絡(アポイント)などを除いて録音再生し逐次記述し研究資料とする。なお、第2回の面接逐語記録は、母子不分離のため録音集録できなかったので割愛する。

3 測 定

カウンセリングの面接逐語記録について、評定尺度法的な分析検討を行なうため、次の発言分析標識と評定法を定め測定する。

1) カウンセラーの発言分析標識と評定法

(1) 発言分析標識

- ① リード的範ちゅう(場面構成、話題選択、質問、リード等)
- ② 非指示的範ちゅう(簡単な受容、内容的操返、感情の承認・明確化・反映等)
- ③ 半指示的範ちゅう(解釈等)
- ④ 指示的範ちゅう(是認・激励、情報・説明の提供、行動の提示、説得、否認・批評等)
- ⑤ 周辺の範ちゅう(面接の終結、関係の終結、親睦的会話、その他等)

(2) 評定法

ひとつひとつのカウンセラー発言を5発言分析標識により分類評定する。

2) クライエントの発言分析標識と評定法

(1) 発言分析標識

- ① 開放性{より体験に開かれつつある(より体験に閉されつつある)}
 - ② 信頼性{より信頼感が生じつつある(より不信感が生じつつある)}
 - ③ 評価性{より主体的に評価しつつある(より依存的に評価しつつある)}
 - ④ 過程性{より過程的であることに満足しつつある(より固定的であることに満足しつつある)}
 - ⑤ 肯定性{より肯定的な態度が表われつつある(より否定的な態度が表われつつある)}
- { }のなかの記述は上昇評定を、{ () }のなかの記述は下降評定の基準を示す。

(2) 評定法

ひとつひとつのクライアント発言を5発言分析標識別に品等評定する。この品等評定は、情報理論的分析検討のための二者択一的なコード化評定(以下 コード評定)であり、コード評定は上昇評定と下降評定とにわけ、それぞれ先行する発言と比較して行なう。

カウンセラーの発言分析標識は、シーマン(Seeman, J.)の研究(1949)⁸⁾のカウンセラー範ちゅうによるものである。また、クライアントの発言分析標識のうち、肯定性については、シーマンの上記研究のクライアント範ちゅうに関する感情範ちゅうの自己肯定的態度あるいは自己否定的態度によるものである。

クライアントの発言分析標識は、ロジャーズ(Rogers, C. R.)の研究(1956, 1963)^{9) 10)}で指摘する治療を受けたあるいは治療後にみられるクライアントの特徴に基づくものであり、それは次のように要約できよう。①自己の体験に開かれていること、②自己の有機体への信頼の発見、③評価の源泉

が自己自身にあること、④過程であることに対する満足の4つであり、さらに、③④を実存的に生きるであろうという表現で総括できよう。

4 手 続

1) 評定

評定者は、研究事例のカウンセリングの担当者を除く、教育相談部所員5名(男子4名、女子1名)による。各評定者は、第1回目(カウンセラー発言26, クライアント発言39), 第2回目(カウンセラー発言24, クライアント発言36)の面接逐語記録について、所定の評定法により実施する。

2) 分析検討

(1) 発言の基準評定はクライアント発言分析標識別に各発言に対する各評定者のコード評定結果を集計し、その上昇評定あるいは下降評定の多い方を各発言の基準評定とする。また、これらのクライアント発言分析標識別基準評定の計に関して、これと同じ操作で基準評定を定める。以下、発言の基準評定を単に発言評定と略記する。

(2) 発言評定の度数分布表を作成し、カウンセラー発言の一貫性、クライアント発言の傾向などを分析検討する。

(3) クライアント発言評定がマルコフ的過程であるとみなし、発言評定の1つ、2つ、3つ、4つの連、すなわち1次、2次、3次、4次推定値の情報的確率を求め、推定冗長度を求めて、クライアント発言評定による推定内的情報性を分析検討する。なお、1次推定値 $H_1 = \log_2 n - 1/n \sum_{i=1}^n \log_2 n_i$, N次推定値 $\hat{H}_N = \hat{H}(N\text{gram}) - \hat{H}(N-1\text{gram})$, 推定冗長度 $C(N\text{gram}) = 1 - \hat{H}(N\text{gram}) / H_{\max}$ であり、() の記号は推定値平均値を示す。以下、 \log_2 を単に \log と略記する。

(4) 治療の場面での言語的關係状況を相互の刺激-反応的關係に置換し、その情報伝達反応における諸情報量を求め、それらの連関などを分析検討する。

3) その他 昭和44年11月から12月までに、所定の方法により実施した。

なお、以下 近似 χ^2 -検定というのは共有情報量(伝達情報量)から近似計算によって算出している。

Ⅲ 結 果

1 発言評定の度数分布

所定の手続によりカウンセラーおよびクライアントの面接逐語記録の発言評定結果をまとめ集計した。特に、カウンセラー発言評定に関する評定者5名の評定傾向について、Q-検定により一貫してなされていることを統計的に確かめてある。なお、以下 発言評定を単に発言と記述する。

第1表 面接回数別カウンセラー発言の度数分布

N \ C	リード	非指示	半指示	指示	周辺	計
1	3	19	1	2	1	26
2	0	22	2	0	0	24
計	3	41	3	2	1	50

第2表 面接回数別クライアント発言の度数分布

N \ E	R	開放性	信頼性	評価性	過程性	肯定性	計
1	D	23	26	27	36	31	143
	U	16	13	12	3	8	52
2	D'	30	27	12	31	22	122
	U'	6	9	24	5	14	58
小計	D _T	53	53	39	67	53	265
計	U _T	22	22	36	8	22	110
計		75	75	75	75	75	375

符号説明 C : カウンセラー発言分析標識

F : クライアント発言分析標識

N : 面接回数

R : コード評定 $\begin{cases} D : \text{下降評定} \\ U : \text{上昇評定} \end{cases}$

(符号以下 同じ)

2 クライアント発言の内的情報

所定の手続によりクライアント発言のコード評定から推定内的情報に関する分析検討を行なう。

第3表には、クライアント発言の内的情報(確率)の計算例を表示してある。ただし、面接回数第1回目、開放性に関する場合である。

符号説明 \hat{H}_1 : 1次推定値
 \hat{H}_2 : 2次推定値
 \hat{H}_3 : 3次推定値
 \hat{H}_4 : 4次推定値 (符号以下 同じ)

第4表には、クライアント発言の推定内的情報(確率)を、面接回数別に表示してある。この表は、第3表に表示してある計算手順により求められたものである。また、テトラグラムの実測値との近似の χ^2 -検定の結果、面接回数第1回目の開放性、信頼性に有意差があり、4次推定値が1次推定情報値と差異があることを示している。なお、表の \hat{T} は1次と4次推定値間の共有情報(伝達情報)である。

第1表には、面接回数別カウンセラー一発言の度数分布を表示してある。

χ^2 -検定の結果、カウンセラー発言に面接回数別の差異がなく、一応非指示的なカウンセラーの発言傾向がある。

($\chi_0^2 = 0.888$, $df = 4$)

第2表には、面接回数別クライアント発言の度数分布を表示してある。

χ^2 -検定の結果、面接回数別コード評定、上昇評定間(U : U'), 下降評定間(D : D')とに面接回数別の差異があり、一応、上昇評定が漸増し下降評定が漸減する傾向がある。(U : U' $\chi_0^2 = 19.061^{**}$, D : D' $\chi_0^2 = 156.132^{***}$ $df = 4$) また、コード評定別小計(D_T : U_T)については、上昇評定にくらべ下降評定が多いといえる。

($\chi_0^2 = 2057.615^{***}$ $df = 4$)

なお、統計的検定の有意水準の符号は、* : $P > 0.05$, ** : $P > 0.01$, *** : $P > 0.001$ で表わしている。

第3表 クライアント発言の推定内的情報（確率）の計算例 （治療回数1，開放性）

テトラグラム (tetragram)			トリグラム (trigram)			デグラム (digram)			モノグラム (monogram)					
記号	ni	ni log ni	記号	ni	ni log ni	記号	ni	ni log ni	記号	ni	ni log ni			
DDDD	9	2.8529	DDD	13	4.8105	DD	17	6.9486	D	21	9.2238			
DDDU	4	8.000												
DDUD			DDU	4	8.000	DU	4	8.000						
DDUU	4	8.000												
DUDD			DUD											
DUDU														
DUUD			DUU	4	8.000									
DUUU	4	8.000												
UDDD	3	4.754	UDD	3	4.754	UD	3	4.754	U	15	5.8603			
UDDU														
UDUD			UDU											
UDUU														
UUDU	5	11.609	UUD	5	11.609							UU	12	4.3019
UUUU	4	8.000												
UUUD	3	4.754	UUU	7	19.651	計	36	12.5259				計	36	15.0841
UUUU	4	8.000												
計	36	81.646	計	36	100.119	計	36	12.5259	計	36	15.0841			
$\hat{H}_{(4)} = 5.169 - \frac{1}{36} \times 81.646$ = 5.169 - 2.267 = 2.902			$\hat{H}_{(3)} = 5.169 - \frac{1}{36} \times 100.119$ = 5.169 - 2.781 = 2.388			$\hat{H}_{(2)} = 5.169 - \frac{1}{36} \times 12.5259$ = 5.169 - 3.479 = 1.690			$\hat{H}_{(1)} = \log n - \frac{1}{n} \sum ni \log ni$ = $\log 36 - \frac{1}{36} \times 15.0841$ = 5.169 - 4.190 = 0.979					
$\hat{H}_4 = \hat{H}_{(4)} - \hat{H}_{(3)}$ = 0.514			$\hat{H}_3 = \hat{H}_{(3)} - \hat{H}_{(2)}$ = 0.698			$\hat{H}_2 = \hat{H}_{(2)} - \hat{H}_{(1)}$ = 0.711								

第4表 クライアント発言の推定内的情報（確率）

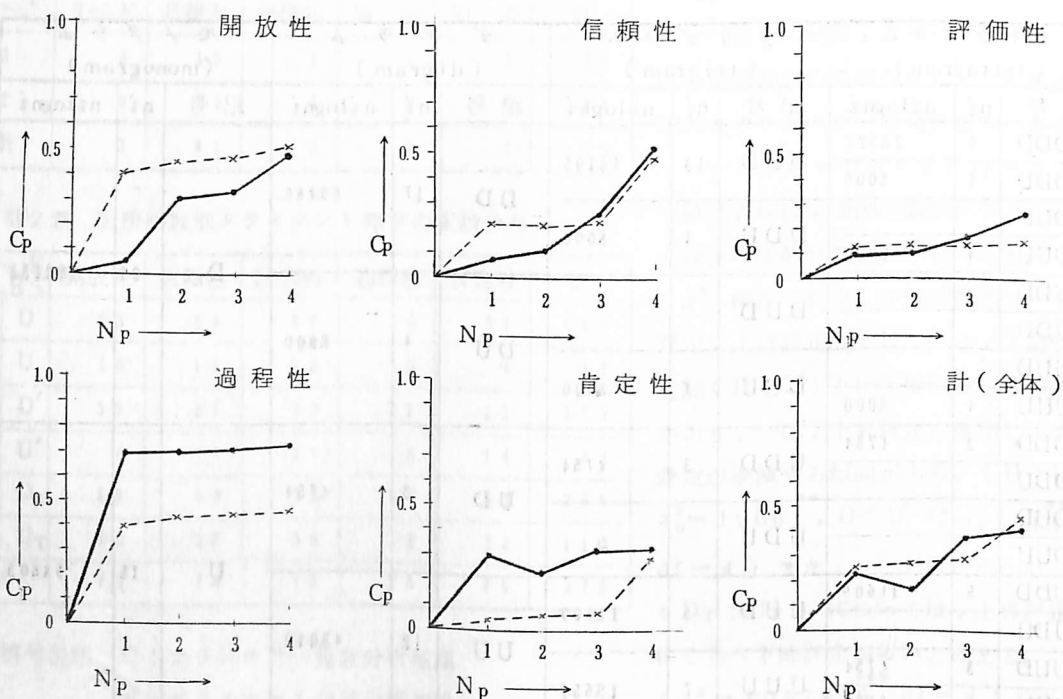
4-1 面接回数第1回目

4-2 面接回数第2回目

\hat{H}	F	開放性	信頼性	評価性	過程性	肯定性	計	\hat{H}	F	開放性	信頼性	評価性	過程性	肯定性	計
\hat{H}_0		1.000	1.000	1.000	1.000	1.000	1.000	\hat{H}'_0		1.000	1.000	1.000	1.000	1.000	1.000
\hat{H}_1		0.979	0.943	0.888	0.309	0.710	0.764	\hat{H}'_1		0.614	0.799	0.885	0.614	0.987	0.746
\hat{H}_2		0.711	0.889	0.886	0.305	0.761	0.811	\hat{H}'_2		0.574	0.780	0.869	0.574	0.961	0.739
\hat{H}_3		0.698	0.747	0.822	0.300	0.682	0.633	\hat{H}'_3		0.527	0.778	0.845	0.574	0.953	0.704
\hat{H}_4		0.514	0.582	0.729	0.294	0.666	0.606	\hat{H}'_4		0.501	0.627	0.833	0.570	0.696	0.564
$\hat{H}_1 - \hat{H}_2$		0.465	0.361	0.159	0.015	0.044	0.158	$\hat{H}'_1 - \hat{H}'_2$		0.113	0.172	0.052	0.044	0.291	0.182
$\chi^2_0, df=7$		23.256*	18.066*	7.983	0.798	2.245	7.935	$\chi^2_0, df=7$		5.169	7.866	2.378	2.012	13.312	8.926

第5表 分析標識別クライアント発言の冗長度

Cp: 冗長度 ———: 面接回数第1回目
Np: 推定次数 - - - - : 面接回数第2回目



第5表には、分析標識別クライアント発言の冗長度を表示してある。これは第4表から算出したものであり、クライアント発言の一つの推移確率を表わし、きまりきった紋切型の発言推移を示す系列依存性の指標である。この冗長度が面接回数を追って高まったものは、開放性に関する冗長度であり、逆に低下したものは、過程性、肯定性に関する冗長度である。さらに、推定回数間で、あまり冗長度の変化がみられないもの、たとえば、過程性に関する1～4次は、1発言から4発言のつながりのどれを取っても、ほぼ等しいコード評定であったことを示している。逆に冗長度の変化が連続的にみられるもの、たとえば、計(全体)に関する1～4次は、1発言から4発言のつながりのどれを取っても、異なるコード評定であったことを示している。

一般的に計(全体)からわかるように、発言のつながりから考えて、推定回数が増すにつれて、冗長度の変化が連続的に上昇するので、クライアント発言に対するカウンセラーの受容性、傾聴性は治療的効果をもたせる治療条件の一つとして欠かせないものであると考えられる。

3 治療的關係における情報伝達反応

第6表には、面接回数別情報伝達反応に関する情報分析の結果を表示してある。これらの表示各種情報量間の関係を(付1)に示してある。(付2)は、情報分析算出基礎集計の一例を表示してあり、これはコード評定別に面接回数第1回のクライアント発言(刺激)に対するカウンセラー発言(反応)の頻度数をまとめたものである。そうして、2変量情報分析を行ない治療的關係における情報伝達反応を確かめる。

第6表 面接回数別情報伝達反応に関する情報分析

単位:ビット

N	刺激(s)	反応(r)	\hat{H}_p	\hat{H}_s	\hat{H}_a	\hat{H}_e	\hat{H}_r	\hat{H}_t
1	D U	$F_s \rightarrow C_r$	3.339	2.294	1.045	2.259	1.080	0.035
			3.118	2.386	0.734	1.904	1.214	0.482
	$C_s \rightarrow F_r$	$\begin{cases} D \\ U \end{cases}$	3.501	1.264	2.237	1.193	2.308	0.071
			3.332	1.358	1.974	1.187	2.145	0.171
2	D' U'	$F_s \rightarrow C_r$	2.570	2.242	0.328	2.220	0.350	0.022
			2.575	2.102	0.473	2.059	0.516	0.043
	$C_s \rightarrow F_r$	$\begin{cases} D \\ U \end{cases}$	2.545	2.242	0.303	0.339	2.206	1.897
			2.551	2.102	0.449	0.479	2.072	1.623

符号説明

\hat{H}_p : 推定情報量
 \hat{H}_s : 刺激情報量
 \hat{H}_a : 付加情報量
 \hat{H}_e : 散失情報量
 \hat{H}_r : 反応情報量
 \hat{H}_t : 共有情報量 (伝達情報量)

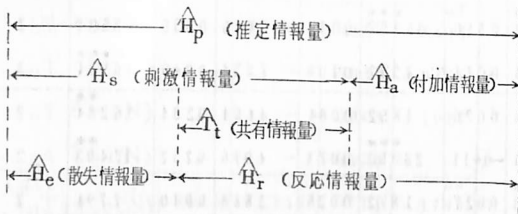
これはクライアント

あるいはカウンセラーの発言(刺激)と,カウンセラーあるいはクライアントの発言(反応)との言語的関係进行分析検討するものである。

(符号以下 同じ)

面接回数第1回目では,刺激情報量(\hat{H}_s)

付1 表示各種情報量間の関係



付2

(例) $\begin{Bmatrix} D \\ U \end{Bmatrix} F_s \rightarrow C_r$ の情報分析の算出基礎集計

面接回数第1回目(): U

$C_r \backslash F_s$	開放性	信頼性	評価性	過程性	肯定性	計
リード	1 (1)	1 (2)	1 (2)	3 (0)	2 (1)	8 (7)
示指示	12 (7)	12 (7)	12 (7)	18 (1)	17 (2)	71 (24)
半指示	(1)	1 (0)	1 (0)	0 (1)	1 (0)	3 (2)
指示	1 (1)	2 (0)	2 (0)	2 (0)	2 (0)	9 (1)
周辺	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
計	14 (11)	16 (9)	16 (9)	23 (2)	22 (3)	91 (24)

としてクライアント発言がカウンセラー発言より大きく,反応情報量(\hat{H}_r)としてカウンセラー発言がクライアント発言より大きく,カウンセラーの受容的,傾聴的態度の表われと考えられる。また,面接回数第2回目では,これらの関係はほぼ等しくなっている。これは,治療的関係が相互に積極的に展開されていることを示すものであろう。

共有情報量(伝達情報量)(\hat{H}_t)が,コード評定の上昇評定(U)の場合が,下降評定の場合により大きくなっている。これは,上昇評定的なクライアント発言が,下降評定的なクライアント発言よりもカウンセラーへの伝達性を高めていることを示すものであり,また,カウンセラーの非指示で代表される受容的,傾聴的発言が,その他のカウンセラー発言よりもクライアントへの伝達性を高めることを示すものである。

面接回数第2回目,カウンセラー発言(刺激)に対するクライアント発言(反応)のコード評定

別の情報分析算出基礎集計表に関する近似 χ^2 -検定において有意差があり,これはカウンセラー発言が非指示であることによるものである。 $\{C_s \rightarrow F_r(D)\} \chi^2_{16} = 199.865, C_s \rightarrow F_r(U) \chi^2_{16} = 98.998$
 $df = 16 \}$

4 受容的カウンセラー発言とクライアント発言間の情報伝達反応

第6表に表示したとおり,近似 χ^2 -検定の結果,有意差のあるカウンセラー発言(刺激)に対するクライアント発言(反応)について,さらに分析検討を行なう。カウンセラー発言に非指示的傾向が強いので,これと他のカウンセラー発言(刺激)の分析標識にわけて,面接回数別,コード評定別集計表

を作成し、クライアント発言（反応）の分析標識別に行ない、その結果をまとめ第7表に表示してある。

第7表 カウンセラー発言とクライアント発言間の情報伝達反応の連関

$C_s \rightarrow F_r \left\{ \begin{matrix} D \\ U \end{matrix} \right\}$ 面接回数・カウンセラー発言（刺激）・クライアント発言（反応）

連関	項	開放性		信頼性		評価性		過程性		肯定性		計		(注) χ^2 -検定 df(自由度)
		\hat{H}	χ^2_0	\hat{H}	χ^2_0	\hat{H}	χ^2_0	\hat{H}	χ^2_0	\hat{H}	χ^2_0	\hat{H}	χ^2_0	
一次連関	nT (C : F)	0.007	0.515	0.081	5.674*	0.003	0.249	0.483	33.484***	0.036	2.557	0.010	0.709	1
	nT (C : N)	0.044	3.080	0.044	3.080	0.044	3.080	0.044	3.080	0.044	3.080	0.222	15.408***	1
	nT (F : N)	0.052	3.647	0.015	1.046	0.207	14.378	-0.483	33.505***	0.028	1.992	0.027	1.918	1
	nA (C F N)	1.501	—	-0.009	—	0.012	—	0.510	—	0.290	—	0.013	—	—
	(計) nT (C : F : N)	1.604	112.690***	0.131	9.132*	0.266	18.453***	0.544	38.437***	0.137	2.526**	0.272	18.913***	2
重連関	nT (CF : N)	1.597	110.727***	0.049	3.458	0.262	18.203***	0.071	4.953	0.100	6.968	0.262	18.203***	3
	nT (CN : F)	1.560	108.163***	0.087	6.052	0.221	15.372**	0.510	35.357***	0.093	6.446	0.050	3.504	3
	nT (FN : C)	1.552	107.596***	0.116	8.086*	0.058	4.074	0.071	4.932	0.108	7.534	0.245	16.994***	3
偏連関	nTN (C : F)	1.507	104.521***	0.072	5.005	0.014	0.993	0.026	1.852	0.064	4.454	0.234	16.284**	2
	nTC (C : N)	1.544	107.080***	0.048	2.412	0.055	3.824	-0.411	28.552***	0.071	4.976	0.252	17.493**	2
	nTT (F : N)	1.553	107.547***	0.005	0.378	0.218	15.123***	0.027	1.872	0.036	3.888	0.040	2.794	2

付1

(例) $C_s \rightarrow F_r \left\{ \begin{matrix} D \\ U \end{matrix} \right\} \cdot N$ の情報伝達反応の算出基礎集計

N・ C _s	1		2		計
	D	U	D	U	
非指示	11	8	27	5	41
その他	3	4	2	0	9
計	14	12	19	5	50

第7表には、カウンセラー発言（刺激）とクライアント発言（反応）との情報伝達反応の連関を表示してある。

重連関は2つの情報分析標識と他の1つの情報分析標識との関連を示し、偏連関は1つの情報分析標識を基準にして他の2つの情報分析標識間の関連を示し、基準となる情報分析標識を表中では（ ）の外に記してある。なお、

（付1）にはこの情報伝達反応の算出基礎集計表の1例を示してある。

一次連関では、カウンセラー発言とクライアントの信頼性・過程性と共に、クライアントの過程性と面接回数とに有意な連関がみられる。重連関では、治療的關係と面接回数との間{ nT (CF : N) }に、クライアントの開放性、評価性および計に有意な重連関がみられる。さらに、計（全体）の偏連関では、面接回数を基準とする治療的關係{ nTN (C : F) }に有意な偏連関がみられる。これらのことは、クライアント発言分析標識の総てにわたって、一次連関、重連関、偏連関がそれらの一部あるいは全体的に有意な連関がみられるので、カウンセラー発言がクライアント発言に影響をおよぼすことが確かめられる。一見無意味情報と考えられる、非指的範ちゅうに評定されるカウンセラー発言が、クライアントの建設的な人格変容を促進するであろうということに一つの保証を与えるものであり、クライアントの治療的体験も多様であって、その変化も種々の様相を呈することが確かめられる。

5 クライアント発言転移とクライアントの沈黙

クライアント発言の内的情報量の一部として、連続するクライアント発言でしかもコード評定が転

第8表 クライアント発言転移の情報伝達反応に関する情報分析
(単位 ビット)

刺激(s)	反応(r)	\hat{H}_p	\hat{H}_s	\hat{H}_a	\hat{H}_e	\hat{H}_r	\hat{H}_t
$C_s \rightarrow F_{r(s)} \left\{ \begin{array}{l} D_{r1s2} \rightarrow U_{r2} \\ U_{r1s2} \rightarrow D_{r2} \end{array} \right.$	$D_{r1s2} \rightarrow U_{r2}$	2.237	0.592	1.645	0.394	1.843	0.198
	$U_{r1s2} \rightarrow D_{r2}$	2.471	0.932	1.539	0.437	2.034	0.495
$F_s \rightarrow r \left\{ \begin{array}{l} D_s \rightarrow U_r \\ D_s \rightarrow D_r \end{array} \right.$	$D_s \rightarrow U_r$	2.321	0.971	1.350	0.750	1.571	0.221
	$D_s \rightarrow D_r$	1.557	0.000	1.557	0.000	1.557	0.000

第9表 クライアント発言転移の
情報伝達反応の関連

項		$C_s \rightarrow F_{r(s)} \left\{ \begin{array}{l} D \rightarrow U \\ U \rightarrow U \end{array} \right.$		$F_s \rightarrow r \left\{ \begin{array}{l} D \rightarrow U \\ U \rightarrow D \end{array} \right.$	
		\hat{T}	x_0^2	\hat{T}	x_0^2
一次 連関	nT (s:r)	-	-	0.365	8.614**
	nT (N:s)	-	-	0.032	0.770
	nT (r:N)	-	-	0.043	1.028
	nA (srN)	-	-	-0.270	-
	(計) nT (s:r:N)	0.043	1.157	0.413	9.744**
重 連関	nT (sr:N)	-	-	0.066	1.129
	nT (Ns:r)	-	-	0.527	8.973**
	nT (Nr:s)	-	-	0.512	8.715**
偏 連関	nT _N (s:r)	-	-	0.337	5.731
	nT _r (N:s)	-	-	0.005	0.101
	nT _s (N:r)	-	-	0.021	0.359

移しているものを、面接回数別にまとめ集計し、クライアント発言転後の内的な情報伝達反応に関する分析検討を行なう。ここでは、カウンセラー発言に続くクライアント発言の連続的転移の場合と、連

続するクライアント発言間に30秒以上の沈黙をはさむクライアント発言の継続的転移の場合とについて行なう。なお、これらの場合を符号で仮に次のように示す。

- ・クライアント発言の連続的転移

$$C_s \rightarrow F_{r(s)} \left\{ \begin{array}{l} D_{r1s2} \rightarrow U_{r2} \\ U_{r1s2} \rightarrow D_{r2} \end{array} \right.$$

- ・クライアント発言の継続的転移 (S:沈黙)

$$F_s \rightarrow r \left\{ \begin{array}{l} D_s \rightarrow (S) \rightarrow U_r \\ U_s \rightarrow (S) \rightarrow D_r \end{array} \right.$$

第8表には、クライアント発言転移の情報伝達反応に関する情報分析を、第9表には、クライアント発言転移の情報伝達反応の連関を表示してある。

クライアント発言の連続的あるいは継続的転移

の場合でも、内的な刺激情報量 (\hat{H}_s) より内的な反応情報量 (\hat{H}_r) が大きく、これは第6表に表示してあるカウンセラー発言が刺激となる場合と類似している。さらに、クライアント発言の継続的転移についての情報伝達反応の関連からみて、クライアント自身が沈黙をとおして、新しい治療的体験をえているものと考えられ、コード評定の上昇評定から下降評定への転移において、クライアントの内的な共有情報量 (伝達情報量) (\hat{H}_t) が無いのが注目されてよい。これらのことから、特に、クライアントが示す沈黙について、それがクライアントの治療的体験にある意味をもっていることが確かめられ、クライアントとの治療的な営みやかわりあいにおいて、カウンセラーが示す受容的態度や非指示的発言の重要性を裏付けするものであろう。

以上のことから、この研究条件の限りにおいて、次のようにその結果が要約できよう。

- (1) 面接あるいは治療的接触を継続するにしたがって、望ましいクライアント発言への変化がみられる。そうして、上昇評定のクライアント発言が増加し、下降評定のクライアント発言が減少する傾向にあるといえる。

- (2) クライアント発言とその推移は多種多様であって、カウンセラーの治療的条件としての受容的、傾聴的態度やそれに基づく発言が望まれる。そうして、マルコフ的過程としてみたクライアント発言の全体的類型性、冗長度あるいは系列的依存性は低いので、これにカウンセラー発言が大きく影響すると考えられる。
- (3) このことはクライアント自身が傷つきやすい状態であると考えられるが、クライアントの建設的発言は、非建設的発言にくらべ、よりカウンセラーに伝達されやすい。そうして、このような、離散的なマルコフ的過程をなすクライアントの内的情報性は、一方において、カウンセラーへの外的情報性となり、治療の関係における情報伝達反応の一端が明らかにできよう。
- (4) 一般的にカウンセラー発言がクライアント発言に与える影響力が大きく、面接の継続とあいまって、より治療的効果を高めることが明らかである。そうして、(3)、(4)とで治療的關係状況がカウンセラーとクライアントとの相互作用的に展開されている過程であると考えられる。
- (5) カウンセリング場面でのクライアントの沈黙が、クライアント自身にとって建設的な時間であり、そのような、なんらかの体験がえられているということで、沈黙が一つの治療的意味あいをもつことが確かめられたということは特筆できよう。

これらの(2)、(3)に基づいて仮説1が、(3)、(4)に基づいて仮説2がそれぞれ実証される可能性が、極めて大きいと考えられるし、情報理論によるこの種の研究が、カウンセリング過程とその評価に関する総合的研究の一方法としても活用できることが事例的に確かめられるが、なにぶんにも一事例を取り上げたにすぎないので、結果やその考察に関しては速断することをさけたい。

この研究計画を共同研究的にともに企画し実施したのは、菊池 碩、高沢 清、荻部良吉、池田要子、白井 稔所員であり、まとめ執筆したのは小川敏通である。

参 考 文 献

- (1) 小川敏通 「カウンセリングにおける訴えの独自性と一回性」応心第29回大会、1962.
- (2) 堺 嘉治他「カウンセリング過程とその評価に関する研究(I)」新潟県立教育研究所紀要、1965. 50集
- (3) 堺 嘉治他「クライアント・ロール遂行過程における人格変容に関する研究」新潟県立教育研究所紀要、1966. 54集
- (4) 小川敏通 「クライアントの経験に関する意味論的研究」応心第33回大会、1966.
- (5) 小川敏通他「カウンセリング過程とその評価に関する研究(II)—治療体験における意味の変化について—」新潟県立教育センター研究集録教育相談編、1968. 1集
- (6) Attneare, F. Applications of Information Theory to Psychology. Holt, Rinehart and Winston, N. Y., 1959. (邦訳 小野茂他「心理学と情報理論—基本概念, 方法, 結果—」丸善KK, 1968.)
- (7) Rogers, C. R. A process conception of psychotherapy. Amer. psychol. 1958. Vol. 13 (邦訳編 皇瀬松他「来諸者中心療報」ロジャーズ選7巻, 岩崎書店, 1964. 第4章)
- (8) Seeman, T. A study of the process of nondirective therapy. J. Consult psychol. 1949. Vol. 13 (邦訳編 伊東 博 「カウンセリングの基礎」誠信書房, 1960. 第8章)
- (9) Rogers, C. R. What It Means to Become a person, In Moustakas, C. E. (Ed.), The Self, N. Y., 1956. (邦訳編 村山正治「人間論」ロジャーズ全集12巻, 岩崎学術出版社, 1967. 第5章)
- (10) Rogers, C. R. The Concept of the Fully Functioning Person. Psychotherapy: Theory, Research and Practice, 1963. (邦訳編 注9)と同掲書., 第3章)